

企業、CO₂削減に汗

東京都内に工場やオフィスビルなどがある企業にとって、二酸化炭素(CO₂)排出量の削減が急務だ。東京都は来週、大規模事業所に二〇一〇年度以降、排出削減を義務づける国内初の「改正環境確保条例」を制定する。実際にどうしたら削減を達成できるのか。取り組みに成功した事例を検証した。

CO₂排出量の大幅な削減を実現した。

原料油を精製する工場は人がいないときは真っ暗だが、一歩足を踏み入ると電灯がつく。人を感知するセンサーがあるからだ。「電力使用量を『見える化』したおかげ」。温暖化対策を担当する宮崎弘幸次長は強調する。二〇〇三年から工場内の百五十カ所以上に電力使用量を調べる機器を設けて、工場内のどこで電力を無駄に使っているか一目でわかるようにした。〇五年には熱を供給するボイラーを更新して燃

料を重油から都市ガスに変えた。都市ガスは重油に比べてCO₂の排出量が少ない。地道な電力の節約と燃料転換で〇六年度までにCO₂を一八%も削減できた。大規模な動力源のある工場に比べて、CO₂排出量の削減が難しいのがテナントビルだ。入居企業の協力がなければ、ビルの所有者が目標を達成するのは簡単でない。エネルギー効率で勝るビルが相次いで新築される中、芝公園(港区)の一角にある九階建ての「黒龍堂芝公園ビル」は築三十八年ながらテナント企業十三社の協力を得て、三年間でCO₂を一五%削減した。

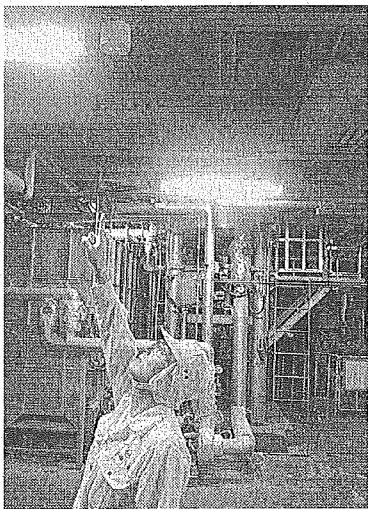
県内工場、風力・廃熱を利用

建設会社OBを省エネアドバイザーに招き、老朽化した照明を付け替え。空調はビル内のあちこちで個別に温度制御できるようにした。毎日、朝と午後の二回、ビル内に五カ所で湿度と温度を計測する。担当者がデータを基に不快指数の一覧表と照らし合わせ、室温をきめ細かく調整する。テナント企業が満足の対策でなければ意味がない。昨年四月からは電力使用料の単価を数%引き下げた。神奈川県内の大規模工場では、発電装置を工夫する例が目立つ。昨年四月に稼働した、緑茶飲料などを製造するサントリービバレッジプロダクツ(神奈川県)は太陽光、風力、水力の三種の発電装置を備える。敷地内の街路灯は風力発電装置を併設。屋根に

月島食品

電力使用無駄一目で 照明・室温細かく管理

黒龍堂ビル



月島食品工業東京工場では節電のため人を感じて点灯するセンサーを設置(東京都江戸川区)

は大型の太陽光発電パネルをつけ、生産現場に電力を供給している。清涼飲料水を瓶詰製造する場合に排出するCO₂は五十九・二キログラム。同社の標準的な工場の約三分の二だ。ビールと発泡酒を製造するキリンビールの横浜工場(横浜市)は昨年、ガス燃やして発電し、その際に出た蒸気を製造工程に使うコージェネレーションシステムを導入した。試算では工場全体から出るCO₂を年間約二割減らせるといふ。CO₂削減に成功した工場、オフィス、研究所に共通するのは、省エネ機器の更新にとどまらず、エネルギー使用量を把握して照明や室温を細かく管理する姿勢だ。「地道な作業に面白みを見いだせるか」(東京都の本明環境配慮事業課長)がカギを握っている。